

健康文化

## 男女共同参画の行方

森田 美弥子

1年半ほど前、研究科長から「大学で男女共同参画推進に関するワーキング・グループをつくることになった。うちの研究科からは女性の委員を出すことになった。ついてはよろしく」という話があり、知識も関心も乏しい私が女性だというだけで選ばれてしまった。現在、私の勤務する大学で女性教員の比率は約10%である。このアンバランスな状況で仕事分担のみ男女平等が進んでいったら大変だと感じた。そう感じたきっかけが、アンバランスを改善するための男女共同参画の仕事であるというのが、何とも複雑な心境だった。

いざワーキング・グループの活動が始まってみると、共同参画の問題といってもいくつかのテーマが含まれていることがわかってきた。私なりに整理すると、(1)人事採用や昇進における問題、(2)職場環境に関する問題、(3)家庭と仕事の両立の問題の3点があると考えられる。(1)は、職場や社会における女性の登用に関する問題だが、(2)(3)は、男性女性に共通した問題として検討していく必要がある。

私はこの分野についての理論家でも運動家でもなく、問題意識の低いド素人でしかない。けれども、男女共同参画という言葉はやはり他人事と片づけてしまうことのできない、心のどこかにひっかかるものとなっている。世の中には私以上に関心の薄い、そもそも男女共同参画なんて初めて聞いたという人もいると思うので、ド素人の立場で見聞きしたり考えたりした、ささやかな体験を紹介してみるのも無意味ではないと考えた。

### 「女性の意見はどうですか？」

会議の場でも雑談の場でも、たまにこう問いかけることがある。私は女性の代表じゃありませんが、と前置きをして返答しなければいけない。考えてみると、男性の意見は？という質問がなされることはきわめて稀である。

集団の中で少数派は、このように一括りにされやすい。少数派の意見も汲み上げようという善意だとは思いますが、個として認知されていないとしたら問題だ。

1999年に施行された男女共同参画社会基本法を受けて、国立大学協会は2010年までに国立大学の女性教員の比率を20%以上に引き上げることを提案した。そのためのポジティブ・アクション（積極的改善措置）が必要とされている。たとえば、業績等が同等と判断されるならば女性を優先して採用するといった方策が考えられる。現在まだまだ大きい男女比率の格差が改善されるまでの移行措置としてのものだが、現場では単純には受け入れられそうにない状況がある。

反対意見を一言で要約すると、逆差別にならないか？ということである。女性が少ないことは容易に認識されるが、具体的な改善策をとると、なかなか難しい。今後増えていくだろうから（あえて積極的なアクションをとらなくても）いいじゃないか、と言う人も多い。実際、女性教員の数は増えている。減少することはないと思われる。ただし、男女同等と感じられる程度にまで改善するには数十年かかるのではないだろうか。国大協の提案する2010年に20%という目標ですら何の工夫もなしに自然に到達できるとは思えない。

女性の側にも抵抗感が存在している。同情で特別扱いしてもらいたくないという気持ちは、これから就職を考える大学院生の中に意外と多い。しかし、その一方で、女性は採用されにくいからと悲観して、進学をあきらめてしまう人もいると聞く。また、男性以上に頑張らないといけないと考え、結婚や出産に不安をもつ人もいる。不安が不安を呼んでしまい、誇張された噂が飛び交うこともあるらしい。事実を確かめたいが、これまで応募者の性別内訳が公表されることはあまりないので、どの程度不利なのか、それとも結局はデマなのか私にはわからない。

### 「女性がいれたお茶はおいしい」

最近このような発言をする人はほとんどいなくなった。女性はお茶汲み／男性は荷物運び式のステレオタイプな役割分担、あるいは「女らしくない」とか「男のくせに」といった固定した性役割観にもとづく表現は、死語とまではいかないが、ずいぶん慎重に扱われるようになった気がする。

これまで私自身は、女性であることによって差別や不利益など大きな障碍に

ぶつかったことはなく、その点に限っては気楽な生活をおくってこれた。教育や研究という本来の業務に関しても、性別による差別を受けたり不利益を被った記憶は、幸いにして個人的にはない。だから、セク・ハラやアカ・ハラという言葉を聞くと、いきなり犯罪行為を連想してしまうが、もっと身近な日常の中に、たとえば「女の子／男の子」「オジサン／オバサン」という呼び方も、いわばイエローカードに値するようだ。うっかり言いそうである。オネエちゃんなどと口走ってしまった中年男性に対して、そういうこと言うからオジサンは困るなあ、くらいのユーモアは許容してほしい。

基盤にある関係が歪んでいると、あらゆる言動はハラスメントにつながりやすくなる。信頼関係がなければ職場は成り立たない。ただし、人柄のよい男尊女卑論者も存在するので、関係の円満さだけですべて解決するわけでもない。年代の要因もあるだろうか。30年近く昔のことだが、尊敬する大先生がお嬢さんのことを話題にしていた時、「まあ女の子だからこの程度で十分」と言ったのを聞いて、私はその先生に指導を受ける立場として差別的な扱いを受けたり感じたりしたことは、後にも先にもなかったので、非常に驚いたことがある。でも、戦前の教育を受けた世代だから仕方ないか、とも思った。

### 「仕事をもっている女性は大変だね」

これは一見親切な言葉である。家事や子育てと仕事との両立の大変さを労ってくれている。大まじめにまったくの善意から出た発言なので逆らわないようにしているが、ああこの人も家事や育児は女性だけがするものと思いこんでいるんだなあと心の中では考える。男性のみならず、女性からもこのように言われる。うちの夫は料理でも何でもできるという話をすると、「協力的なんだねえ、うらやましい！」と感心されることはとても多い。協力的という言葉もちよつと微妙なところがあり、本来私がやるべきことに協力してもらっている、という意味ならそれは事実とは異なる。私の方がよほど協力していない状態になっていて申し訳ないくらいなのだが、ここで言いたいのは我が家の特殊事情についてではなく、男性の中にも女性の中にも伝統的な性役割観や家庭観はかなり根強く残っているものだという点である。

男性は仕事、女性は家庭という考え方は、女性だけでなく男性にとっても迷惑なのではないかと思う。家族と過ごしたり余暇を楽しんだりする個人的な時

間は、性別とはかかわりなく大切なもののはずである。最近の大学は私のようなものでも相当忙しい。家庭との両立どころか仕事だけでも十分こなせないくらい忙しい時がある。意識と発想の転換をして、ワーカホリックにならないよう気をつけたい。

### 「共同」参画なんだから…

男女共同参画は女性のためのもの、と考えられているふしがあるが、そうではないはず。女性の社会参画の問題が落ち着いたら男性の家庭参画や自分らしさ回復の問題が浮上してくるだろう。大学の男女共同参画ワーキングに關与して見て、「人間らしく生きる」というのがおそらく共同参画社会の大きな目標なのだとは私は理解した。

既に父親の子育てや、職場ストレスが話題となってきている。「子どもの運動会や懇談会に行けない」「保育園へのお迎えがいつもギリギリの時間になり困っている」「親の介護を家族で交代しながら何ヶ月も続け、自分の方が倒れそうだった」といった苦勞をしながら生活している男性も増えてきた。そこで男女平等になったと喜んでいる場合ではもちろんなく、負担を押しつけ合うのでもなく、じゃあどうするかを考えなくてはいけない時期に来ている。

理念より実際に目を向けたいのだが、ここでは具体的な提案はできなかった。やはり私にはまだ問題意識が不足しているのかもしれない。現段階で私に言えるのは、誰の中にも知らず知らずに身につけてしまっている性役割の固定観念が存在すること、「女性だけが大変」と言っていると「じゃあ頑張っただけね」と返されるだけになってしまう危険性があること、大変さを男女で分かち合うという発想でなく、大変さ自体を軽減していくためにやれることから一つずつぶしていくことだろうか。

(名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授)